

# 火星

平成二十六年二月号



七曜抄

(八)

山尾玉藻

初夢の湯殿に遇ひし比奈夫翁

梟に母の朱の椀つかひをり

眉ありて素性らしきが雪達磨

それ以上ふくら雀となれず並ぶ

蚤の市風花ぐせとなりにけり

鮫鰯のやややしき骨拵りけり

あはうみに藻の流れ込む寒日和

まつ黒の牛の眼の中鶏乳む

自転車の倒れたる音寒椿

節分や箸にかかりし花がつを

# 太白星

冬空を刈る木鋏の柄の朱いろ  
まつり太鼓小学校の角を来る  
寒鯛や海に開きし大鳥居  
寒満月産みたる山の暮れ残る  
山頂に星一つある夜寒かな  
梟の棲む山の端に月出でし  
水音を遠くに聞ける冬の蝶

杉浦典子

浜口高子

手より手へ掛大根の総出なり  
灯を消して霜のきしみに覚めゐたり  
風花や波止のスクリユ―錆まみれ  
ト口箱の鱸反りたる寒さかな  
内陣の鏡の捉ふ冬紅葉  
水煙の空にけぶれる冬紅葉  
冬夕焼ひとりに椅子のあまたなる

# 火星作品

山尾玉藻選

茸狩やかわいてゐたるけもの径

大和郡山城

孝子

けふ生きてきれいな落葉拾ひけり

神が神さそうて来たり枯蓮

神留守のからくれなるの鮪井

足音に蹠寄り来寒さかな

宝塚山本耀子

暦売のテントに御所の松の影

朝の声の散らかつてゐる置炬燵

かざす手に蜜柑のほふ駅火鉢

咳く吾を吾のいたはる実南天

雨の打つたび真直ぐ降る楓紅葉

小林成子

さんかくの蛹に日差し十二月

クール便冬の銀河をわたり来し

運転の夫には見えず冬の虹

冬桜咲きそろひ色なかりけり  
ひとり去りひとり寄りくる冬桜  
家鳴らす風のひと日や糸編む  
煮凝やテレビが天変地異言へる  
夢殿の八角こがす冬茜  
拭きこみし柱の匂ふ今朝の冬  
夕映えの水より抜きし竹筵竿  
木立抜けきしセーラーの茜色  
夕映えを均してゐたり浮寝鳥  
夢殿の日に蠟螂の枯れゆける  
出張の鞆曳きゆくみやこどり  
寒鰯を提げ夕星を急ぎけり  
目貼りして泥の匂ひのする駅舎  
木守柿見ゆる畳に針運ぶ  
雨戸繰る胸に受けたる冬月光  
マフラーの上に鼻ある寒さかな  
残菊の香をふみゆけるかちがらす

宝塚山田美恵子

蘭定かず子

八幡坂口夫佐子

# 選のあとに

山尾 玉藻

けふ生きてきれいな落葉拾ひけり 城 孝子

強靱な精神力で大病と闘われた作者だが、今も不安や心細さから解放されておられない。「けふ生きて」の咳きは心底よりの感謝と祈り。美しい落葉を拾って行く姿に、命を丁寧に一つ一つ掬いあげて行く姿が重なり、強くこころ打たれる。同時発表作〈神が神さそうて来たり枯蓮〉は季語の本意を正しく捉えた祝祭性ある見事な一句。今更ながらこの作者の力量を感じる。

朝の声の散らかつてゐる置炬健 山本 耀子

家族が出勤や登校するまでの束の間、銘々が短い会話を交わしつつ忙しそうにしているのだろう。その慌しさが「声のちらかつてゐる」に上手く表出された。炬燵だけがその慌しさの外にある。

運転の夫には見えぬ冬の虹 小林 成子

景色を楽しめず居眠りも出来ず、運転手ほどの悪い役割はない。折角の虹が見えないとは愈々お気の毒。しかも「冬の虹」ご主人が車を止めて仰がれた時には跡形もなく失せていたことだろう。

家鳴らす風のひと日や糸糸編む 山田美恵子

風が扉や窓ガラスを鳴らす日、糸糸を編みつつ戸外の風音に耳を澄ませる作者。糸糸の暖かさが寒々しい風音を募らせるようだ。

夕映えを均してゐたり浮寝鳥 蘭定かず子

夕映えに染まる水面で淫寝鳥たちが揺れ合っている。絶え間なくゆっくり揺れ合う様子を「夕映えを均す」と詩的に描

いた。

目貼りして泥の匂ひのする駅舎 坂口夫佐子

目貼りされた鄙びた駅の待合に隙間風が吹き込み、その度に舎内に泥の香が匂い立つ。ぬかるみ道を来た長靴の泥か、畑で引いて来た大根や牛芽の泥か、寒々しい待合の様子が想像される。

乾鮭の束ねありたる疎らかな 深澤 鱧

あほらしいことをぬけぬけと述べているようだが、句の表の芯で「乾鮭」の真を捉えつつ、句の裏で「疎ら」を重層的に楽しんでいる。老練の力と境地、俳と遊びのこころがある。

吉兆の紅葉たちまち掃かれけり 藤本千鶴子

料亭「吉兆」の景ではつまらない。散り紅葉が余りにも美しく、作者は喜びごとの前兆かも知れぬと眺めていたのだ。その紅葉がさっさと掃かれてしまい、少し淋しく恨めしく思えたのだろう。

着ぶくれの腰の降り来し天守閣 大山 文子

天守閣まで狭く急な階段が続いている。見ると、着ぶくれた人物が手摺に縋るように降りてくる。大きなへつぴり腰が可笑しい。

すぐそこに原発のある冬の瀟 西村 節子

時事俳句は難題だが、掲句は露わに時事を語ることなく静かな主張をしっかりと包蔵している。「すぐそこに」は強いアイロニー。

家元に柿の枝とどく初しぐれ 林 範昭

華道の家元と限定するのは常識、楽しめない。「家元」「柿の枝」「初しぐれ」のトリプルプレーに成る奥行を楽しめば良い。(以下略)

同人一

米澤光子

# 恒星圈

指先のなき手袋や歯のさみし  
白菜を外から剥がす乳が張る  
餌場まで家鴨の踏める霜柱  
風花を吸うてしまひし牛の鼻  
夫の羽織借りていよいよ着ぶくれて

伊勢きみこ

蘭定かず子

うるはしき阿弥陀三尊冬ぬくし  
煮麺をうましうましと小春かな  
南無大師立像あふぐ冬青空  
堂縁にいただくお薄花八つ手  
檜皮葺の屋根の下なり日向ぼこ

晴れわたる夜や白菜の締まる音  
川涸れて線路の音のそれつきり  
はや小さくなりし子の靴冬ひばり  
毛氈におでん待ちをり十二月  
草庵に日なた日陰やみそさざい

山本耀子

渡辺数子

風の木のてつぺんにぬし冬の鵞  
山眠るみ佛長き耳をもち  
着ぶくれて拾ふ皇居の松ぼくり  
神留守の畝に罅入る諸畑  
かろがると引き擦つてゆく落葉籠

冬たんぽぽの村の入口常夜燈  
水鳥の寄り来し堂の日和かな  
犬に声かけて夜寒の警備員  
異国語に笑顔で返す紅葉茶屋  
エル・グレコの絵を見て来たり冬茜

# 獅子座

山尾玉藻推薦

涼野海音

秋風や家鴨汚れて戻りたる  
水底の石を見てゐる秋扇  
爽波忌やローマ数字の腕時計  
俎に残れる鱗神の留守

井上淳子

荒草のこんなところに番鴨  
兄の脛さすらば窓に小鳥来る  
高千穂に日のたつぷりと干大根  
ゆき過ぎてもどる子規庵初時雨

今澤淑子

一部始終諾ひ石露の咲きにけり  
越してゆきけりひひらぎの咲ける空  
廊渡る裸足一列寒四郎  
一陽来復花の塚虫の塚

藤田素子

幼稚園の椅子の並びし大根焚  
嵯峨菊の丈の揃ひぬ冬の蠅  
後の月暗号めきしヘブライ語  
冬大樹ポール・マツカートニー老いず

西村節子

綿虫に道ゆづりけり楡の下  
脇門の衛士の敬礼冬来る  
冬ぬくしラベルは河内赤ワイン  
背を向けて麦蒔の声掛け合へり

藤本千鶴子

小春日や花嫁歩く川向う  
山二つ下り来て眺む紅葉山  
ぼろ菊の罪あるごとくうなだるる  
銀杏散る京大前の弁当屋

前田忍

品書の紙の白さや走り蕎麦  
風呂敷の結び目柔と十二月  
背の日を舐めぬる猫や花八つ手  
指笛のひとひびきあり冬木立